

Title	The House of the Seven Gables における Hawthorne の時間
Author(s)	藤江, 啓子
Citation	Osaka Literary Review. 20 P.144-P.156
Issue Date	1981-11-30
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/25637
DOI	10.18910/25637
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

The House of the Seven Gables における

Hawthorne の時間

藤 江 啓 子

1844年7月27日、Nathaniel Hawthorne は次のように *American Note-books* に記している。

. . . I sat down to-day-July 27th, 1844, at about ten o'clock in the forenoon—in *Sleepy Hollow*, a shallow space scooped out among the woods, which surround it on all sides, it being pretty nearly circular, or oval, and two or three hundred yards—perhaps four or five hundred—in diameter. The present season, a thriving field of Indian corn, now in its most perfect growth, and tasselled out, occupies nearly half of the hollow; and it is like the lap of bounteous Nature, filled with bread stuff. . .

.
Now we hear *the striking of the village-clock*, distant, but yet so near that each stroke is distinctly impressed upon the air. This is a sound that does not disturb the repose of the scene; it does not break our Sabbath; for like a Sabbath seems this place, and the more so on account of the sacredness of the Sabbath. Yet it is not so, for we hear at a distance, *mowers whetting their scythes*; but these sounds of labor, when at a proper remoteness, do but increase the quiet of one who lies at his ease, all in a mist of his own musings. There is *the tinkling of a cow-bell*—a noise how peevishly dissonant, were it close at hand, but even musical now. But hark! There is *the whistle of the locomotive*—the long shriek, harsh, above all other harshness, for the space of a mile cannot mollify it into harmony. It tells a story of busy men, citizens, from the hot street, who have come to spend a day in a country village; men of business; in short of all unquietness; and

no wonder that it gives such a startling shriek, since it brings the noisy world into the midst of our slumbrous peace. (イタリック筆者)

このスケッチを Leo Marx が *The Machine in the Garden* を書くにあたってのパラダイムとして大きく取りあげていることは周知の事実である。Sleepy Hollow は Washington Irving の傑作 “Legend of Sleepy Hollow” の背景となっているところである。物語は、小学校教師 Ichabod Crane が一人の愛らしい村の娘 Hatrina Van Tassel をめぐって武骨者 Brom Bones と渡り合い、ついに首なし騎士なる伝説上のお化けに化けた Brom Bones にカボチャを投げつけられて殺されてしまうという何とも悠長な話であり、Sleepy Hollow はハドソン川河口の周囲を山に囲まれたくぼ地で、文明も移民もそこを避けていってしまう世界中で最も静かな所として描かれている。そうした Sleepy Hollow に劣らぬ静かでのどかなくぼ地に腰を下ろし、鳥のさえずりを聞き、あたりの自然にとけ込む Hawthorne であったが、その時、彼は人工の音を聞く。すなわち、村の時計の音、草刈り人が大鎌をとぐ音、そして牛につけたベルの音である。Hawthorne は Leo Marx がいうように “image of nature” を “image of man and society”¹⁾ に移したのである。それらの音は遠くで聞こえる限り、平安を乱すものではなく、音楽的でさえあると描かれている。「しかし、聞け！」と Hawthorne は続ける。ここにおいて、彼の田園的平安は機関車の音によって完全に掻き乱されたものとなる。機関車が19C初頭に台頭しつつあった機械文明の象徴であることは言うまでもない。また、この世の煩わしさを逃れ、庭に思想を求めようとするのは、Virgil や Theocritus に始まり、Spenser の *Shepherd's Calendar* を通る西欧の牧歌の伝統を引くものであり、もはや産業革命の進行や宗教的迫害のため、自国に庭園を求めることの出来なくなったヨーロッパ人、とりわけイギリス人が新天地アメリカに理想的庭園を求めたのはもっともなことである。H. N. Smith は *Virgin Land* において、理想的庭園生活を「庭園の神話」と呼び、R. W. B. Lewis は19Cのアメリカ人を「アメリカ的アダム」と呼んだ。そこには、当然、

エデンの園を意識した庭園としてのアメリカの姿がある。その庭が、厳密な意味で開かれておろうと囲われておろうと、それが野放図な荒野でないことは確かであり、都市と荒野の中間の場所、Leo Marx のことばによれば“middle ground”²⁾であり“reconciliation”³⁾の場であることは否定できまい。そうした庭園としての *Sleepy Hollow* とそこに侵入する機械としての機関車を描いたこの Hawthorne の *American Notebooks* からの一スケッチを Leo Marx が *The Machine in the Garden* のパラダイムとしてとりあげたのはもっともなことである。

さて、Leo Marx 紹介が長くなってしまったが、それは、私がこの小論において *The House of the Seven Gables* を論じる時、やはり、この *American Notebooks* からの一スケッチを詳細に検討する必要があると思うからである。とりわけ Leo Marx が軽く遣り過ぎた時計の音、大鎌、そして牛のベルに注目するものである。時計が代表する時間、大鎌を持つといわれる死、そして畑を耕やしているのであろうか、牛のベルが代表する労働、この三つの抽象概念を我々は読みとることができる。大鎌は死が持つとも、また時間が持つとも言われるが、我々が肉体の存在である限り、チクタクと鳴る時計の時間の延長線上に死があることを思えば、時間と死は同質のものである。*American Notebooks* では、草刈り人が大鎌をとぐ音を労働の音としているが、ここで牛のベルを代表させることについては差し支えあるまい。とりわけ Hawthorne の庭園が、エデンの園を強く意識した神話的空間であることを考え合わせ時、その庭園にしるのびよる時間、死、そして労働は、もはや庭園に住めなくなった墮落した人間が背負わねばならぬ宿命なのである。それらを代表する者が遠くで聞こえている限り決して平穏を乱すものではないが、あまりにも近く切実なものとなる時、恐しい宿命となって人間の前に立ちはだかる。この真実を作品に描いたのが、*The House of the Seven Gables* なのである。

さて、牛のベルは即座に我々に、Hepzibah が家の一角に開いた店のベルを思い出させる。作品 *The House of the Seven Gables* は、長い間、隠

通生活をしていた老貴婦人 Hepzibah が生計を立てるためにやむを得ず店を開くところから始まるが、その店のベルは、客が来るたびに鳴る仕組みになっていて、働くことを知らなかった Hepzibah の神経をすり減らす。Hawthorne はこのベルの鳴る様を意識的に何度も印象的にくり返し描写しており、Hepzibah にとって苦しい労働のしるしである。

しかし、この作品を解く中心的手掛かりはその末端にある死をも含めての時間の問題なのである。

The House of the Seven Gables は物語の始まる 200年前に、Pyncheon 大佐が大工 Matthew Maule の土地を不当にも自分のものにし、そこに家を建て、なおかつ Matthew Maule を死に追いやった罪が、呪いとなって今なおその家敷にまわりついているという状況設定になっている。Pyncheon 大佐の肖像画は彼が死んだ部屋の壁に今も掛けられており、それは“evil influence”⁴⁾の象徴であり、“Evil Genius of his family” (p.21) であると述べられている。先祖の罪が後の世代にまで代々伝わるという態度を Hawthorne は一貫してとっており、現在の Pyncheon 判事は、200年前の Pyncheon 大佐にそっくりであると述べられている。そしてそのことは“the weakness and defects, the bad passions, the mean tendencies, and the moral diseases which lead to crime, are handed down from one generation to another” (p. 119) を意味すると記されている。

このある意味での歴史観を、Hawthorne は、この作品に時間の概念を導入することによって、過去から現在、そして未来へと延びるよりはっきりとした連続線の上で捉えようとしている。その連続線を描く道具は、正面の破風にとりつけられた日時計であり、また Pyncheon 家敷の庭に湧き出る Maule の井戸である。

物語が始まる 200年前、Pyncheon 大佐が自宅でパーティを開くことになった朝、正面の破風に日時計がとりつけられたと述べられているが、その日時計が、三代後の Alice Pyncheon の時代にも正確な時を打っていたことが、Matthew Maule の孫のことばを通して明らかにされている。

“Three o’clock!” said he to himself. “My father told me, that dial was put up only an hour before the old Colonel’s death. How truly it has kept time, these seven-and-thirty years past! (p. 191)

この日時計は、今もなお、正面の破風にあって正確な時を刻んでいるはずであり、地球が自転し、また公転する以上、必ず正確に移りゆく時間であり、人間が肉体の存在である以上、必ず死へ向かう時間である。Marvell の “To his Coy Mistress” において “slow-chapt power” (ゆっくりと噛み砕く顎の力) と表現されている時間であり、また Poe の “Pit and Pendulum” において、先に斧のついた振り子が床に縛りつけられた主人公の上に刻々と下りてくる時間で、ある意味で残酷非情ともいえる時間である。これは、まさしくクロノスと呼ばれるべき時間であろうし、現実の actual な時間なのである。この時間はまた、そもそも大工 Matthew Maule がその水の快きゆえにそばに小屋を建て、今もなお家敷の庭にあり絶えず妖しいまでに水を湧き出しているモールの井戸の時間である。

The play and slight agitation of the water, in its upward gush, wrought magically with these variegated pebbles, and made a continually shifting apparition of quaint figures, vanishing too suddenly to be definable. Thence, welling over the rim of moss-grown stones, the water stole away under the fence, through what we regret to call a gutter, rather than a channel. (p. 88)

過去に犯された罪は、このように作品においてははっきりと提示されたクロノスの時間によって、物語が展開される現在を通り過ぎようとする。

ところで、この時間としばしば対照して用いられるのは、アイオンと呼ばれる時間である。それは移りゆく時の一瞬「今」を捉えようとする時間であり、精神的な、spiritual な時間である。*The House of the Seven Gables* には、actual な時間が終始流れていることは先に述べた通りであるが、その actual な時間が spiritual な時間によって止まる場面が、逆に言えば、spiritual な時間の介在によって、actual な時間がより真に迫っ

たものとなる場面が、作品中三ヶ所に求めることができる。一つは、Pyncheon 家敷の庭において Clifford が Phoebe と楽しいひとときを過ごす場面、今一つは、やはりその庭において Phoebe と Holgrave が恋を語る場面、そして第三に Pyncheon 判事の死の場面である。

まず、第一の場面について考察してみよう。無実の罪に陥れられ、長い牢獄生活を送り、Pyncheon 家敷に帰ってきた Clifford であるが、彼を待ちかまえていたのは、経済的困窮、希望のない未来、そして妹 Hepzibah のしかめっ面であった。彼は唯一の楽しみを若い Phoebe に見出し、二人は幸せはひとときを Pyncheon 家敷の庭で送るのであった。その庭は “It was the Eden of a thunder-smitten Adam, who had fled for refuge thither out of the same dreary and perilous wilderness, into which the original Adam was expelled.” (p. 150) と描写されている如く、エデンの園に見立てられている。その庭において、過去に不幸を背負い、希望のない未来を前に、Clifford は過ぎてゆく今を楽しもうとするのであった。

With a mysterious and terrible Past, which had annihilated his memory, and a blank Future before him, he had only this visionary and impalpable Now, which, if you once look closely at it, is nothing.
(p. 149)

過ぎゆく今は impalpable で visionary であると形容され、そうしたむなしい時間を持つ Clifford は絶えず移り変わるモールの井戸の模様を見るのが好きであったと述べられている。

He had a singular propensity, for example, to hang over Maule's Well, and look at the constantly shifting phantasmagoria of figures, produced by the agitation of the water over the mosaic-work of colored pebbles, at the bottom. (pp. 153-54)

今は impalpable で visionary であり、constantly shifting phantasmagoria of figures であるだけに、一層その一瞬の幸せを捉えて楽しもうとするのである。その一瞬の幸せは “airy happiness” と表現され、Hawthorne は、

その一瞬の幸せをしっかりと捉えて享受せよと次のように言う。

If not the thing itself, it [happiness] is marvellously like it, and the more so for that ethereal and intangible quality, which causes it all to vanish, at too close an introspection. Take it, therefore, while you may. Murmur not—question not—but make the most of it! (p. 158)

時は過ぎゆくものであるがゆえに、それだけ一層、幸せなこの一瞬を捉えよというのは、まさしく西欧の *carpe diem* の伝統であり、また、庭で “give me a rose” (p. 150) と叫ぶ Clifford はまさしく *carpe rosam* の具現である。

actual な時間が spiritual な時間によって止まる二番目の場面は、やはり Pyncheon 家の庭において、Phoebe と Holgrave の一組の男女が恋を語り合う場面である。一旦家に帰り再び Pyncheon 家敷を訪れた Phoebe であったが、彼女を待っていたものは、Pyncheon 判事の死であり、Hepzibah も Clifford も逃亡していない。そっと戸を開けて迎え入れてくれたのは Holgrave であり、彼は事情を説明し、Phoebe を庭へ誘う。Pyncheon 判事の死を前にして、二人は、とりわけ Holgrave は恐怖を感じるどころか、Phoebe に再会できた喜びを強く感じ、彼女に愛を告白する。そして彼女もその愛に答えるのであったが、その時の様子が次のように描かれている。

And it was in this hour, so full of doubt and awe, that the one miracle was wrought, without which every human existence is a blank. The bliss, which makes all things true, beautiful, and holy, shone around this youth and maiden. They were conscious of nothing sad nor old. They transfigured the earth, and made it Eden again, and themselves the two first dwellers in it. The dead man, so close beside them, was forgotten. At such a crisis, there is no Death; for Immortality is revealed anew, and embraces everything in its hallowed atmosphere. (p. 307)

恋をする二人の時間は止まったのである。死へ向かって移りゆく時間は止まり、そこに啓示されるのは Immortality である。神の奇跡がなされ、そこは、もはや地上ではなく、エデンなのである。恋する男女が時間を止めようとする、あるいは恋する男女の時間が実際に止まったように思えるのは、古今東西にわたる茶飯事であるが、我々は、Hawthorne 自身、愛する妻 Sophia との心の触れ合う瞬間が、永遠の時間であり、時間を超えたものであり、時間を超えたものであるという、あの *American Notebooks* からの一節を思い出す。

Indeed, we are but shadows; we are not endowed with real life, all that seems most real about us is but the thinnest substance of a dream, —till the heart be touched. That touch creates us, —then we begin to be—thereby we are beings of reality, and inheritors of eternity Do you not feel, dearest, that we live above time and apart from time, even while we seem to be in the midst of time? Our affection diffuses eternity round about us. (*American Notebooks*, Oct. 4, 1840)

しかし、Phoebe と Holgrave の至福は、家へ戻ってきた Hepzibah と Clifford のもの音に、一瞬のうちに破られてしまう。“But how soon the heavy earth-dream settled down again!” (p. 307) と述べられている如くである。

三番目に時間が止まるのは Pyncheon 判事の死の場面である。この場面は筋の運びからいえば第二の場面、Phoebe と Holgrave の恋の語らいの場面よりも前に位置するものだが、第一、第二の場面が、いずれも庭を背景とした喜びの時間であるのに対し、この Pyncheon 判事の死の場面は死という質を異にする時間であるため、便宜上、最後に考察することにする。

この Pyncheon 判事の死の場面は、作品中最も巧く描かれまた印象的である。誰もいない部屋の肘掛け椅子にひとり座る Pyncheon 判事、彼は身動き一つすることなくじっと座っている。息をする音も聞こえない。ただ

時計のチクタクという音だけが聞こえてくる。その時計は、使いにやった Hepzibah が Clifford をつれて再び現れるまでの時間を計るために、判事自身が、わざわざ自分の上着のポケットから取り出し、手にしっかりと握っていたものである。その時計がチクタクと鳴る中、Hawthorne は判事の今日一日の忙しい予定を並べあげ、こんなにゆっくりと櫛の肘掛け椅子に座っていてよいのかと問いかける。とりわけ今日は、彼が州知事に選ばれるためには大切な晩餐がある。その食事まであと10分。急げ! と Hawthorne は判事に呼びかける。しかし、ついに判事は起き上がることなく一日は過ぎてしまう。しかし、明日は起きますかと次のように尋ねる。

Up, therefore, Judge Pyncheon, up! You have lost a day. But tomorrow will be here anon. Will you rise, betimes, and make the most of it? Tomorrow! Tomorrow! Tomorrow! We, that are alive, may rise betimes tomorrow. As for him that has died to-day, his morrow will be the resurrection-morn. (p. 276)

“Tomorrow! Tomorrow! Tomorrow!” は明らかに *Macbeth* のあの有名な一節からの借用である。明日、そして明日、そしてまた明日と「記録されし時の最後のシラブル」まで“dusty death”に至る道を歩まねばならないのは我々人間の宿命であり、そこには恐ろしいまでに正確に移りゆく時間が流れている。その時間の恐ろしさを Hawthorne は次のように表現している。

. . . this little, quiet, never-ceasing throb of Time's pulse, repeating its small strokes with such busy regularity, in Judge Pyncheon's motionless hand, has an effect of terror, which we do not find in any other accompaniment of the scene. (p. 277)

やがて月の光が部屋にさし込み、町の時計が12時を打つ。その時、不思議な光景がくり広げられる。今までに死に絶えたすべての Pyncheon 家の人々がこの部屋に集まってきたのである。そもそも判事が櫛の肘掛け椅子に座ったまま死んでいるこの部屋には、奇妙な言い伝えがあった。その部屋

は、200年前 Pyncheon 大佐がやはり同じ椅子に座り死んでいた部屋であり、そこには Pyncheon 大佐の肖像が掛けられ、また大きな鏡が掛けられている。その鏡の奥深くには今までそこに影を映したあらゆるものの姿が納められているというのである。そして Matthew Maule の子孫がその鏡の秘密と何らかの関係があり、一種の催眠術で鏡の中の世界を大にぎわいをさせることができるというのであった。今、まさしくその光景がくり広げられる。老いも若きも男も女も様々な Pyncheon 家の先祖が現れてくる。そして、その中には Pyncheon 判事の息子がおり、また Pyncheon 判事自身がいる。今や Pyncheon 判事は肉体の存在、actual な存在を離れ、霊の存在、spiritual な存在となったのである。ここにおいて Hawthorne は“Custom House”において月の光と鏡が演出したあのロマンスの世界、actual なものと imaginary なものが出会う中立地帯としてのロマンスの世界を築きあげている。

We were betrayed into this brief extravagance by the quiver of the moonbeams; they dance hand-in-hand with shadows, and are reflected in the looking-glass, which, you are aware, is always a kind of window or door-way into the spiritual world. (p. 281)

もはや判事は actual な時間を決して生きることのない spiritual な存在となってしまったのである。そしてその時、判事の時計が止まる。“The watch has at last ceased to tick” (p. 281)。もはや判事にとって時計の時間、クロノスの時間、actual な時間は存在しなくなったのである。「しかし」と Hawthorne は続ける。“the great world-clock of Time still keeps its beat” (p. 281)。なるほど判事にとっての時計は止まったが、「時」の偉大な宇宙時計は相変わらず鼓動を続けていると、我々を再び現実の時間へと引き戻すのである。

以上、*The House of the Seven Gables* を流れる二つの時間を見てきた。作品を一貫して過去から現在、そして未来へと正確に流れゆくクロノスの時間とも呼ぶべき actual な時間、そしてアイオーンとも呼ぶべき永遠の

時間、spiritualな時間である。spiritualな時間は、背後に現実の動く時間が流れているがゆえにより一層静かな停止した時間となり、現実の時間は、精神的な静止した時間と並べられることによって、より切実なものとなる。

ここで一つの疑問が湧いてくる。果たして過去の罪を背負いながら流れてきたクロノスの時間は、物語の結末において、その荷を降すのであろうかという疑問である。判事の死とそれに続く Holgrave と Phoebe の結婚によってすべての呪いが解けるのであろうか。最後の Pyncheon 家敷からの出発を手放しにハッピー・エンディングとして喜んでよいのであろうか。必ずしも答えは肯定ではなさそうである。

Matthew Maule と Pyncheon 大佐の間の諍が、Pyncheon 大佐という悪者の死で終わらなかったように、否、むしろ Pyncheon 大佐の死によって呪いが始まったように、判事の死も決して終わりではなく、むしろ始まりなのである。判事の明日は復活の朝であるという引用は先にあげた通りだが、その復活の日に判事は何をするだろうか、とさらに Hawthorne は問いかける。“Will he begin this new day—which God has smiled upon, and blessed, and given to mankind—will he begin it with better purposes than the many that have been spent amiss? Or are all the deep-laid schemes of yesterday as stubborn in his heart, and as busy in his brain, as ever?” (p. 282) そして Hawthorne は後者を選ぶ。“For it is our belief, whatever show of honor he may have piled upon it, that there was heavy sin at the base of this man’s being” (p. 283)。判事の罪は決して死によって贖われなかったのである。そして皮肉にも Phoebe, Holgrave, Hepzibah, Clifford の 4 人が Pyncheon 家敷を後にして次に向かったところが、この判事とその息子のその不幸な死によって手に入った判事のいなかの邸宅なのである。そこにはまた新たな呪いが待ち受けているであろう。

このように、クロノスの時間は決して罪の荷を降ろすことなく未来へと流れてゆくのである。そしてその罪とは、決して個々の罪に止まることのない、人間が人間として背負わねばならぬ原罪なのである。*The House of*

the Seven Gables の時間は決して物語の筋の終結と共に終わることのない、さらに未来へと延びる時間であることをモールの井戸が教えてくれる。

Maule's Well, all this time, though left in solitude, was throwing up a succession of kaleidoscopic pictures, in which a gifted eye might have seen fore-shadowed the coming fortunes of Hepzibah, and Clifford, and the descendant of the legendary wizard, and the village maiden, over whom he had thrown love's web of sorcery. (p. 319)

原罪を背負う *The House of the Seven Gables* の時間は、決して作品内にとどまることのない、もっと大きな広がりをもつ時間なのである。

Leo Marx が引用した *American Notebooks* の一スケッチに戻ろう。Leo Marx はこのスケッチに庭園に侵入する機械のパラダイムを読みとった。私は、ここに原罪を犯し、庭園に住むことのできなくなった人間が背負わねばならない宿命、すなわち時間、そしてその末端にある死、そして苦しい労働を読みとった。それはまさしく *The House of the Seven Gables* の世界である。とりわけ時間について論じてきたわけであるが、その時間は絶えず正確に移動する時間であり、その時間を打つ時計の音は遠くで聞こえる限り平穏を乱すものではないが、あまりにも近く切実なものとなる時、残酷でさえある。その残酷非情な現実の時間から我々を救ってくれるのが、精神的時間なのである。一瞬を捉えた喜びの時間は、人間にとってやすらぎの時間となる。死とてある意味ではやすらぎである。喜びの時間を庭園に捉えたことは Hawthorne のエデンへの希求をあらわしている。Hawthorne の庭園は都市文明からの逃避のみならず、墮落以前のアダムとイヴが住んだといわれるエデンを想定した理想の空間なのである。新妻 Sophia との幸福な生活を描いたスケッチ “The Old Manse” を思い出す。旧牧師館に隣接する庭はエデンとして描かれ、そこで幸せな生活を送る二人はアダムとイヴとして描かれている。二人にとっての労働は草木の手入れで、それは “light toil” (*CE*, X, 13) であると述べられ、また時間に関しても “there is no measurement of time” (X, 33) と述べられている。

しかし、その空間での喜びの時間は東の間の幸せにすぎず、Hawthorne はまもなく税関でのつまらぬ生活へと、現実の生活へと引き戻される。“Providence took me by the hand and . . . has led me . . . from Old Manse into a Custom House” (X, 33-34)

作家体験においても作品体験においても、喜びの時間、やすらぎの時間は一瞬の恍惚にすぎず、我々読者はすぐに現実の時間へと引き戻されてしまうのである。“As Adam Early in the Morning” と歌い、自らをエデンの住人アダムと同一視した Whitman とは違い、Hawthorne の人間の認識は、決して庭園に住むことの出来ぬ墮落した人間の認識なのである。

註

- 1) Leo Marx, *The Machine in the Garden : Technology and the Pastoral Ideal in America* (New York: Oxford University Press, 1979), p. 13.
- 2) *Ibid.*, p. 23. *et passim*
- 3) *Ibid.*, p. 87. *et passim*
- 4) *The House of the Seven Gables, The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* (Columbus : Ohio State University Press), vol. II (1965), p. 21. 以下の引用はすべてこの版による。